体裁だけでは駄目

工学部教授　小島信夫

私に意見をきかせたいといわれるが、私の意見は特にない。学校当局とほぼ同じである。もちろん体裁のいい言葉は何もない。学校、全共闘、その他の諸君というようなものの区分が許されるとして、こういうものの関係は、かなり状勢によって動きも処置も変るものである。時間によってといってもいいことかもしれない。状勢とか時間とかいうものは、もともと政治的なものだという意味でもある。ある時には、ある方法しかない、ということである。主義主張があるとしても、その通りには行かないということである。当り前のことである。

こんな問いがささやかれる。

なぜ機動隊をいれたか。早過ぎたのではないか。機動隊を入れる口実を捜していたのではないか。どうして全共闘と連絡をとらなかったか。通路をもたなかったか……。私個人は先を見る眼もあまりもたないことは自覚には思わぬが、私は体裁のいいことは性に合わないし、信用しない。あすればよい、こうすればよかった、というのをきくと、私は笑いたくなる。よその話だが安田講堂へ機動隊を入れて陥落させたのはまちがっていた、というのをきいたときも私はおかしないい方だと思った。

もし改革というものを行うならなるべく根本のところをやった方がよいことはいうまでもない。いったい根本とはどこまでのことをいうのか。言葉にだまされるわけに行かない。学生もわれわれも改革し改革されねばならぬものだとして、いったい、この微妙で困難なことが、この動いて行く世の中のうちでどんなふうにやって行くのか。ヒステリーを起したくなるとすれば、教師も学生も同じことだ。教師が何かエライものだとか、権威だとか、超人的なものだ、と思わぬがよい。せいぜいがあなた方のオヤジ程度だ、いやオヤジそのものだ。ヒステリーを起すわけに行かぬのは、一つはヒステリーのきき役にまわりされてしまったからだ。立場上忍耐づよさを強いられているからだ。

ある時には、あることをしなければならない。ボソボソささやかれているような意見などというものとはかんけいない。しなければならないことはするより仕方がない。意見にだまされるわけには行かない。

（英語）

一日も早い正常化を

短大助教授　中原精一

十月九日の大学の措置について、当日配布された「学園の開放にあたって」（明大校報資料一四号）というパンフのなかで、大学当局は次の三つの理由をあげている。

その一つは、他大学の共闘学生を含めた占拠学生による学内破壊による学園の荒廃を見過ごせないことその二つには明大を拠点とする過激学生の行動が神田周辺の市民生活をおびやかしていることに対し、社会的責任を感じていること、そしてその三つは八幡山グラウンドにおける学友会が主として他大学学生に妨害されたことから現状のままでの話し合いが困難となり、自衛措置を考慮しなければならなくなったこと、などである。事実、全共闘諸君の大学側のあらゆる行動・提案に対する拒否の姿勢、大学構内の諸施設の荒廃ぶり、及び市民生活にたいする大学の社会的責任などの諸点から、いわば対症療法として今回の大学のとった措置はやむをえなかったと考える。

しかし、この措置によって明大紛争に解決のきざしがみえたと考えるのは早計であって、ロック・アウトはいわば「ウミ」がたまったまま蓋口をふさいだようなものである。むしろみかたによっては一層教職員・学生間の相互不信が増大したともいえる。たとえば私の所属する短大では学生諸君の間で自主的にバリケードを解除しようという動き（可能性は別として）があったが、これらの諸君にとって、ロック・アウトは希望したものではなかったし、また新聞報道のように機動隊の導入が過激学生に対する治安対策を優先したものであったのであれば、警察当局と大学当局との結びつきに不信をいだくものもすくなくないと思われる。

さらに明大紛争の起点となった八項目要求やパリストの直接の原因である大学立法拒否そして学内改革などの諸問題が棚上げにされたまま、過激学生の排除、校舎整備、授業再開という現象面の解決にだけ精力がそそがれる「正常化」が推進されることになるとすれば、学内はますにもまして精神的荒廃の場と化するであろう。

中川学長は今後も話し合いの機会をもうけてはいると言明している。したがって、今後は時間が不信のみぞを深める現状を十分に認識したうえで、一日も早く「正常化」の中味を教職員・学生の前に明らかにする機会をつくるべきであろう。

（憲法）